

「教育と公共」研究部会（第31回）

日時：2021年12月10日（金）13:00～16:00

場所：オンライン（Zoom使用）

出席：田嶋一・上野正道・浅井幸子・狩野浩二・仲田康一・藤井佳世 各兼任研究員
吉久知延所長・山口和人・川上智子(野間教育研究所事務局)

内容：（1）狩野研究員：島小における「努力点」。金子緯一郎編『島小十一年史』（1966）より紹介

- ◆島小では年度ごとに「努力点」を決め、その達成を目指して努力していた。1年目（昭和27年）から11年目（昭和37年）までを総覧、「本年度の努力点」に見る島小の学校づくりを検討する
- ◆努力点：年度によって異なるが、職場の民主化、事務の簡素化・効率化、形式主義・概念主義を廃し実質主義尊重、職員会・研究会・談話会の充実、図書充実、教具学習具の充実、理科施設の充実、校庭の計画化、父兄との協働、児童教育の充実、学力の充実、正しいことばの使用、体育・生活技術の向上、教育技術の向上、合唱・舞踊・描画など表現活動の充実、職員の創作活動の充実、集中力、芸術教育、民族意識・愛国心・祖国意識の向上等々
- ◆11年間を総覧すると、努力点は次第にシンプルに磨き上げられていくようにみえる。島小では、教師の教材解釈が常に課題とされたが、それは島小が表現活動を主体とする授業を重視し、その表現において使用する教材を文化の中から求めたことと深いつながりがある。一方で、理科や算数などの認識系の教科目において、新たな教材を発掘したり開発したりするということには関心が向いていない。このことは、島小が教材そのものよりも、子どもと子ども、子どもと教師との対話を重視したこととかかわりがある。教材さえ優れたものであれば、教師の指導力は問題ではないという時代の風潮への挑戦と見ることもできる

（2）上野研究員：「イングランドのシティズンシップ教育と公共」

博士論文2本の抜粋紹介

- ◆北山夕華『英国のシティズンシップ教育-社会的包摂の試み』早稲田大学出版部、2014年
 - ・第1章 社会的包摂/排除と実質的シティズンシップ
 - ・第3章 シティズンシップ教育と社会的剥奪
 - ・第5章 学校における民主主義
- ◆菊地かおり『イングランドのシティズンシップ教育政策の展開』東信堂、2018年
 - ・第3章 シティズンシップの明確化と人権との差異化 —第2期カリキュラム改革
 - 第1節 権利の明確化と国籍との関連の模索／第2節 シティズンシップ教育の必修化をめぐる審議経過にみる論点／第3節 『クリック報告』にみるシティズンシップの定義／第4節 共通カリキュラム「シティズンシップ」への反映
 - ・第4章 連合王国における共生に向けたシティズンシップ —第3期カリキュラム改革
 - 第1節 アイデンティティの基盤としての国籍／第2節 地下鉄・バス同時爆破事件とカリキュ

ラム見直しの要請／第3節 『アジェグボ報告』にみるシティズンシップの定義／第4節 共通カリキュラム「シティズンシップ」への反映

- ・次回研究会 1月14日（金）13：00～